

# 「戦争体験」という教養

——「わだつみ」の戦後史——

福 間 良 明

【要約】 本稿では、戦没学徒の遺稿集『きけわだつみのこえ』の受容状況を検証しながら、戦争体験をめぐる社会意識の変容について考察する。『きけわだつみのこえ』は、一九四九年に東大組合出版部より発刊され、ベストセラーとなった。その後も長く読み継がれ、現在では「戦争体験」に関する一種の正典ともみなされている。だが、大学生というエリート層の手記は、なぜ、全国的に受け入れられたのか。また、同書の「正典」としての社会的位置づけも、決して古いものではない。『きけわだつみのこえ』は一九五九年に再刊されたが、それは、大衆的な新書のシリーズである光文社カッパ・ブックスの一書としてであった。今日、広く流通している岩波文庫版の刊行は、一九八二年である。そこには、「わだつみ」をめぐる社会的な認知の変容が浮かび上がっているし、さらに言えば、戦後における戦争の記憶と「教養」の関わりも見出すことができよう。本稿は、こうした問題意識に立ちながら、『きけわだつみのこえ』およびその刊行を契機に設立された日本戦没学生記念会の戦後史について、考えていきたい。

史林 九三巻一号 二〇一〇年一月

## はじめに

岩波文庫にも収められている戦没学徒の遺稿集『きけわだつみのこえ』は、今日、「現代の古典」（日本戦没学生記念会「新版刊行にあたって」）ともいふべき地位を得ている。だが、そうしたイメージが生み出されたのは、決して古いもので

はない。

同書の初刊は一九四九年だが、その十年後には、光文社カッパ・ブックスとして再刊された。同時期に岩波文庫編集部にも企画が持ち込まれたが、当時の編集部はそれを受けなかった。岩波文庫版『きけわだつみのこえ』が発刊されるのは、それから四半世紀近くを経た一九八二年のことである。

だとすると、そこにはいくつかの疑問が思い浮かぶ。戦没学徒という「知性」「教養」を連想させる者たちの手記集は、戦後一五年の時期に、なぜ教養主義的な岩波文庫に収められなかったのか。そして、なぜ、大衆的な色彩のつよいカッパ・ブックスの一書とされたのか。そもそも、『きけわだつみのこえ』の認知や評価は、時代とともにどう変化したのか。さらに、そこには戦争の記憶と「教養」の絡み合いも浮かび上がる。大学生という一部のエリート層の手記集が、なぜ「戦争体験の古典」と認知されているのか。

戦争体験を綴った書物は、戦後多く出されてきた。沖縄戦下のひめゆり学徒隊を扱った仲宗根政善『沖縄の悲劇』（一九五一年）や農民兵士の戦争体験を描いた右手県農村文化懇談会編『戦没農民兵士の手紙』（一九六一年）などは、その一例である。だが、そのなかでも『きけわだつみのこえ』の知名度は群を抜いている。増刷頻度は、カッパ・ブックス版で八一刷（一九九七年八月時点）、岩波文庫版で五七刷（二〇〇四年時点）に達しており、一九五〇年と一九九五年には、これをもとにした映画も製作されている。

だとすると、戦後における戦争の記憶において、教養はどのように関わってきたのか。そのことが、戦争体験の継承や断絶にどう作用してきたのか。

本稿は、そのような問題意識に立ちながら、『きけわだつみのこえ』、および、その発刊をきっかけに設立された日本戦没学生記念会（わだつみ会）の戦後史を考えていきたい。<sup>①</sup>

① 戦没学徒の遺稿集を内在的に考察したものとしては、大貫恵美子

『学徒兵の精神誌』（岩波書店、二〇〇六年）や岡田裕之『日本戦没

学生の思想」（法政大学出版社、二〇〇九年）がある。それに對し、本稿は、メディア史や社会運動史の観点から、『きけわだつみのこえ』や日本戦没学生記念会をめぐる議論の変遷に着目する。日本戦没学生記念会（わだつみ会）とそこで紡がれる戦争体験論の変容については、拙著『戦争体験』の戦後史（中公新書、二〇〇九年）で詳述している。本稿は、そこでの議論を下敷きにしつつ、その後に入手できた資料（わだつみ像破壊事件当時者の未公刊手記など）も参照し、戦争体験論と教養の関係を時系列的に整理していく。なお、紙幅の都合もあるので、本稿で扱う時期は、岩波文庫版『きけわだつみのこ

## 一 遺稿集のベストセラ―

### 『わだつみ』への共感

一九四七年一二月、東京帝国大学出身の戦没学徒三九名の手記を集めた『はるかなる山河に』が発刊された。版元は、東京大学協同組合出版部（現東京大学出版会）である。初版は三〇〇部であったが、編集部の予想を超えて大ヒットし、一年間で二〇万部の売り上げとなった。

こうした反響を受けて、東大協同組合出版部は、東京帝大出身者のみならず、全国の大学・高等専門学校出身の戦没学徒の手記集の編纂を企画した。そこで生まれたのが、『きけわだつみのこえ』である。この書物は、一九四九年一〇月に刊行された。

この書物には、七五名の戦没学徒の手記が収められた。数行程度のメモのようなものもあれば、詩歌を綴ったものもあった。また、戦場や兵營の様子を記したものがあ一方で、新カント派や京都学派の哲学を論じている文章もある。ただ、

え』が発刊された一九八二年ごろまでとしたい。それ以降の議論については、上記の拙著を参照されたい。わだつみ会の歴史については、阪正康『きけわだつみのこえ』の戦後史（文藝春秋、一九九九年）がある。同書の前半は、関係者へのインタビューを多く盛り込みながら、活動の経緯を描いているが、機関誌や関係者の著作を広く見渡したうえで戦争体験論の変容を検証するものではない。また、同書の後半は、一九七〇年から一九九四年まで理事長職にあった中村克郎の立場に沿って、九〇年代のわだつみ会の内紛を扱うことに重きが置かれて

その多くに共通していたのは、軍国主義や戦争遂行への違和感であった。

上原良司（沖繩戦で特攻死）の遺稿では、「現在日本が全体主義的な気分に含まれてゐる」ことが批判的に言及されたうえで、「私は明確にいへば自由主義に憧れておりました」「戦争に於て勝敗をえんとすればその国の主義を見れば事前に於て判明すると思ひます」と綴られていた。<sup>①</sup> ビルマで戦死した松岡欣平の手記でも、「世はまさに闇だ。戦争に何の倫理があるのだ。大義の為の戦、大義なんて何だ。痴者の妄言にすぎない。宿命と感ずる以上、自分は戦に出ることは何とも思はない。然しそれで宿命は解決されるのだらうか。世の中は再び平和をとりもどせるのであらうか」と記されていた。<sup>②</sup>

この遺稿集は、『はるかなる山河に』の評判もあつて、多くの人々に読まれた。フランス文学者の杉捷夫は、「平和とは何か——わだつみの声に寄す」（一九五〇年）のなかで、「戦歿学生の書き残した短い文章のどれ一つでも、私の胸を突き上げ、喉をつまらせ、拳をにぎつて駆け出したい衝動に私をかり立てないものはない」と述べていた。<sup>③</sup> プロレタリア作家の佐多稲子も、「この一冊を私はしばく涙のために手から離した。（中略）これはまた多くのく学生ではなかつた兵士たちの、平和な生活に対する挙げえなかつた渴望の声に通じるものでもある」と評していた。<sup>④</sup>

昭和初期の大学・専門学校進学率がおよそ三パーセントであつたことを考えれば、『きけわだつみのこえ』は、大学生という特殊な階層に属する者たちの手記集ではあつた。だが、この遺稿集は大学生というインテリ層というよりは、意に沿わない形で戦争に動員されたあらゆる人々の思いを代表するものとして、受け止められた。

それゆえに、この書物はビッグヒットし、一九五〇年のベストセラー第四位の売れ行きを記録した。同年には、この遺稿集を原作にした映画も公開された。これも同じく興行的に成功を収め、『映画年鑑 一九五一年度版』でも「全国封切配取額二〇一五万円という驚異的記録」をあげたことが特筆されていた。<sup>⑤</sup>

レッド・ページと再軍備

だが、それにしても、『はるかなる山河に』といい、『きけわだつみのこえ』といい、なぜ、これほどまでに読者の涙を誘い、また、後者については、映画化までなされたのか。

その背景には、当時の社会状況があった。一九四六年五月に開廷された極東国際軍事裁判（東京裁判）では、南京をはじめ、各地での日本軍の蛮行が明らかになり、「東亜新秩序」「大東亜共栄圏」といった理念が欺瞞に満ちたものであったことが、広く知られるようになった。必然的に、多くの人々を戦争に巻き込み、戦死・罹災させた軍部や政治家に対する国民の怨嗟は強いものとなった。そうしたなか、学問への熱情や肉親への愛情を断ち切って戦線に赴かなければならなかった学徒兵の悲哀に、人々は自らを投影した。

冷戦や再軍備をめぐる政治状況も、無関係ではない。一九四〇年代後半から米ソの冷戦が激化し、一九五〇年六月には朝鮮戦争が勃発した。米軍基地が多く点在する日本では、再び戦火に巻き込まれることが懸念された。さらに、日本はマッカーサー指令のもと、同年八月に警察予備隊を創設、再軍備に踏み切った。そのことも、「また戦場に駆り出されるのではないか」という社会的不安を掻き立てた。

言論統制の動きも目立ち始めていた。一九四七年夏には、下山事件・三鷹事件・松川事件といった国鉄をめぐる不穏な事件が続発した。政府はこれらの事件を共産党の破壊工作と示唆し、国鉄労組等の共産党員の逮捕に踏み切った。一九五〇年七月には、GHQは新聞社に共産党員や同調者の追放を指示し、いわゆるレッド・ページが始まった。

『きけわだつみのこえ』が読まれたのは、このような時代であった。再軍備と言論統制が進む状況においては、再び「反戦」の主張が弾圧され、戦地に国民が駆り出されることが予想された。そうした事態を招かないために、「反戦」的な学徒兵像がその悲哀とともに強調されたのであった。

だが、同時に、『わだつみ』のなかに「教養」が読み込まれていたことも、見落とすべきではない。旧制第一高等学校教授であった市原豊太は、「鳥の大尉の祈り——戦没学生の手記について」（一九四九年）のなかで、田辺元『哲学通論』の余白に遺稿を綴った学徒兵・木村久夫の記述に言及しながら、「これらは皆、彼らが死ぬまで学問と芸術に憧れてゐたことの成果であり、このやうな傾向は『きけわだつみのこえ』や『はるかなる山河に』の人々すべてに共通であつて、学生精神はまことに着実なものだつたのである」と述べていた。英文学者の本多顕彰も、学徒兵たちが「戦いつつある間にさえ、真理を求め、学問を棄てることに抵抗している」ことに着目していた。<sup>⑦</sup>

戦没学徒の「教養」のなかに戦争批判や反戦が読み込まれることも、多かつた。本多は先の記述に続けて、学徒兵たちが、「真のヒューマニズムの立場」「真理探究の立場」から「反人道的、反真理的な戦争に対する正当な批判」を持ち、「内に激しい抵抗を抱」いていたことを強調している。佐多稲子も、先の文章のなかで、「ここに明らかにされた青年たちの声は、それが学生であることによつて、精神を無にし、頭を空虚にする痛ましい努力が語られ、文化と平和に対する人間の希望のじゅうりんされてゆく犠牲が示されている」と述べていた。そこには、教養主義の殉教者効果を見ることができるといえる。

大正期から昭和初期にかけて、大学や旧制高校では教養主義が隆盛した。教養主義とは、主として文学・哲学・思想・歴史方面の読書を通じて人格を陶冶しようとする文化である。もともと、阿部次郎『三太郎の日記』や西田幾太郎『善の研究』のほか、カントの著作など、内省的な傾向を帯びた著作が多く読まれたが（内省的教養主義）、大正末期にはマルクス主義が流行するに伴い、『資本論』『共産党宣言』なども多く読まれた（マルクス主義的教養主義）。だが、戦時体制になると、マルクス主義のみならず自由主義も弾圧の対象となり、教養主義文化も停滞する。

しかし、戦後になって、教養主義は再興した。一九四七年に『西田幾多郎全集』第一巻が発売されたとき、版元の岩波書店の前に徹夜で一五〇〇人の行列が並んだという逸話は、よく知られている。一九四六年一月に東京帝大で行われた調査によれば、一般教養書では、河合榮治郎、西田幾多郎、三木清、和辻哲郎といった教養主義知識人の代表著書が多く読まれていた。また、羽仁五郎、山田盛太郎、大内兵衛といった戦前からのマルクス主義者の著作やレーニン『国家と革命』も、多くの読者を獲得した<sup>⑧</sup>。そこに浮かび上がるのは、内省的教養主義やマルクス主義的教養主義の復活である。では、戦時期に潰えた教養主義は、なぜ戦後に復活できたのか。その要因を、竹内洋は以下のように説明している。

旧制高校をはじめとする高等教育文化の解体や教養主義の衰微と軍国主義の昂進は共変関係にあった。共変関係はしばしば因果関係に読み替えられやすい。高等教育文化の解体や教養主義やマルクス主義が抑圧されたがゆえにあの戦争があったのだ、教養主義やマルクス主義の復活こそ軍国主義にならないためのものである、と。高等教育や教養主義は、殉教者効果もち、リバイバルに威光が増した<sup>⑨</sup>。

旧制高校を基盤とする教養主義は、殉教者としての威光をもって、戦後によみがえった。旧制高校は一九五〇年に新制大学やその教養部へと切り替わったが、教養主義はその後も、大学キャンパスに受け継がれることになった。

前述のように、本多顕彰は学徒兵の遺稿のなかに、「真理探究の立場」からなされる「反人道的、反真理的な戦争に対する正当な批判」を見出したが、そこには教養主義の殉教者効果も浮かび上がっていた。

#### 庶民的教養と「わだつみ」

ただ、見落としてはならないのは、このような評価のしかたは、決して知識人に留まらなかったということである。旧

制高校や大学に根ざした教養主義は、本来、学歴エリートたちに固有のものであった。しかし、「わだつみ」に教養を読み込み、それに涙したのは、彼らに限られていたわけではない。大阪瓦斯株式会社の社内報『がす燈』（一九四九年五月一日号）には、以下のような『はるかなる山河に』の書評が掲載されていた。

本書の内容を静かに読んで行くと厭戦気持を抱き乍ら死んだものが可成り多かつた。強制的に戦争に連れて行かれた彼等は不平を感じていたが、それでも学徒としての誇を失わなかつた。今日あつて明日なき命を知り乍ら岩波文庫を手放し得なかつた者もいた。割り切れぬ気分を本書に遺している。

死に直面した彼等は老熟した学者達もなし得ない程の透徹した批判を下している。教養の高さと云うものが読者の胸を犇々と打つ。

この書評者の学歴等は不明ではある。だが、戦没学徒兵の「教養の高さ」とそれに根ざした「感激をそそる迫力」は、ガス工事会社の事務職員から現場労働者までを含む広い層に共感可能なものとして提示されている。これは、あくまで『はるかなる山河に』の書評ではあるが、『きけわだつみのこえ』の社会的な受容についても、同様のことが言えよう。

大学生というインテリによって綴られた『はるかなる山河に』や『きけわだつみのこえ』は、戦後の教養主義と相まつて受容されたが、それは知識人に留まるものではなかつた。その教養の芳香は、しばしば一般の庶民をも広く魅了していたのである。

だが、それも当然と言えば当然であつた。戦後の教養への憧憬は、知識人や大学生ばかりではなく、大衆層にも裾野を広げていた。そのことは、『葦』『人生手帖』といった「人生雑誌」の隆盛にもうかがうことができる。

『葦』（葦会）は一九四九年一月、『人生手帖』（緑の会）は一九五二年一月に創刊された。これらはいずれも、農村の青

少年や工場の若い労働者を主な読者層としており、読書や綴り方を通じた人格形成や「真実」の模索をめざしていた。

もちろん、学歴エリートの教養主義とは異なり、『資本論』やカント、ヘーゲル、あるいは難渋な『善の研究』などの書物が推奨されるわけではない。あくまで、非インテリでも可能な読書や日常の経験に依拠した作文の投稿が奨められていた。だが、その目的は、中等教育・高等教育を受けることができなかつた読者の人格陶冶であり、戦争批判・政治批判・労働環境批判といった観点の醸成にあつた。その意味で、『葦』や『人生手帖』には、内省的教養主義やマルクス主義的教養主義に通じるものがあつた。

『はるかなる山河に』や『きけわだつみのこえ』が広範に受容されたのも、こうした庶民的な教養空間・読書空間の存在があつた。さらに言えば、それは日本戦没学生記念会（第一次わだつみ会）の盛り上がりにもつながつていた。

『きけわだつみのこえ』の発刊を期に、その編者（東大協同組合出版部）や手記が収められた遺族が中心となつて、一九五〇年四月に日本戦没学生記念会が設立された。この平和運動団体は、以後、一九五〇年代末までのあいだに、徴兵制復活反対署名運動や原水爆禁止署名運動を積極的に展開した。この組織には、大学生のみならず、『人生手帖』や『葦』を読んだ高校生も多く入会した。両誌の発行責任者が日本戦没学生記念会の要職を占めていたこともあり、わだつみ会機関紙と両誌の読者層はかなりの程度、重なり合つていた<sup>⑩</sup>。

戦後間もないこの時期には、「教養・読書を通じた人格陶冶」という規範は、非インテリにも広く共有されていた。戦時期に完全に抑え込まれた教養主義の殉教者効果は、戦後の知識人や学歴エリートの間に教養信仰を復活させたばかりではなく、その威信を大衆レベルにまで広げていた。大学生らエリートのの手記集でしかない『山河』『わだつみ』は、こうしたなかで、広く国民的に受容されていった。

他方で、「わだつみ」に対する批判や違和感も見られなかったわけではない。とくに、敗戦を三〇歳前後で迎え、青年期に自由主義やマルキシズムの思想にもふれていた戦前派知識人やそれより上の世代には、そうした傾向が顕著だった。一九一三年生まれの荒正人は、一九四九年に『きけわだつみのこえ』を評した文章のなかで、「この手記を残した青年たちが最高の教育を受けたとはいいながら、その文章とか教育などがおしなべて平和な時代の中学上級生のそれに近く、「小学校のときから戦争のなかに投げこまれていたかれらの教育水準がこれほどひどいものになつてゐる」ことに驚いてゐる。<sup>⑩</sup>

ギリシャ哲学者の出隆も、「『わだつみのこえ』になにをきくべきか」（一九五〇年）のなかで、「本来に私の痛ましく思つたのは、あの眼界の狭さである。広く世界の情勢に気をくばつていたものは、ほとんどいない」「かれらには『自己』とか『自我』とか『個性』とかの自由や悩みはありあまつていても、その投げこまれてゐる世界戦争の展開を通して支配している大きな法則それ自らを、この法則が戦争を支配しているということを『考える』などいうゆとりはなかつたであらう」と記してゐた。<sup>⑪</sup>

そこには、内省的な教養はあつても、社会科学的な教養に欠ける学徒兵への批判的な視線が浮かび上がる。

もつとも、それも当然と言えば当然であつた。終戦時点で二〇歳前後の学徒兵世代（戦中派）は、戦時体制下に青春期を送つてゐた。折しも教養主義が衰退してゐた時期であり、彼らが自由主義やマルクス主義にふれ得る機会は乏しかった。そこには、数多の思想書・哲学書にふれ得た年長世代の教養体験との大きな隔絶があつた。それだけに、彼らは教養豊かな年長知識人たちに、「事変後の学生」（満洲事変以降に青春期を送つた世代）と呼ばれ、その「無教養」を蔑まれがちだった。荒や出の「わだつみ」批判も、戦前派知識人である彼らの学徒兵世代に対すこうした認識に通じるものであつた。

そこには、教養主義に内在する暴力も浮かび上がっていた。長い歳月をかけて学識をつんだ年長者からすれば、若者は押し並べて教養の浅い者でしかない。つまり、教養の価値観を内面化するかぎり、若者たちは年長の教養主義者の劣位に置かれ、永遠にそこから抜け出ることができない。教養とは、学識ある年長者を頂点としたヒエラルヒーを不断に生産し続ける暴力装置であった。

そのことは、「教養」（一九二六年）と題した和辻哲郎のエッセイからもうかがうことができる。小さな創作に精を出し、能動的に社会に関わりとうとする若者に対して、和辻はこう語っている——「君は自己を培って行く道を知らないのだ。（中略）世界には百度読み返しても読み足りないほどの傑作がある。そういう物の前にひざまづくことを覚えたまえ」<sup>⑭</sup>。教養に依拠した価値観は、「百度読み返しても読み足りないほど」の古典や、それらを広く、かつ深く咀嚼している年長者への従属を自明のものとする。竹内洋の指摘にあるように、「教養主義を内面化し、継承戦略をとればとるほど、より学識をつんだ者から行使される教養は、劣位感や未達成感、つまり跪拝をもたらす象徴的暴力として作用する」のである<sup>⑮</sup>。教養主義知識人が、戦時期のキャンパスに「事変後の学生」を見出し、戦没学徒に「眼界の狭さ」「無教養」を感じ取ったのも、こうした跪拝の暴力のゆえでもあった。

- ① 『さげ、わだつみのこえ』東大組合出版部、一九五二年、二頁。
- ② 同上、一三三頁。
- ③ 杉捷夫『平和とは何か』『短歌研究』七一六、一九五〇年、四頁。
- ④ 佐多稲子『生かされねばならぬ感銘』東大組合出版部編『わだつみのこえに應える』東大協同組合出版部、一九五〇年、四九—五〇頁。
- ⑤ 映画『さげ、わだつみの声』（一九五〇年）をめぐる議論については、拙著『「反戦」のメディア史』（世界思想社、二〇〇六年）参照。
- ⑥ 市原豊太『鳥の大尉の祈り』『中央公論』一九四九年一月号。引用は『わだつみのこえに應える』（前掲）七三頁。
- ⑦ 本多顕彰『平和への祈り』東大協同組合出版部編『わだつみのこえに應える』東大協同組合出版部、一九五〇年一〇〇頁。
- ⑧ 永嶺重敏『東大生はどんな本を読んできたのか』平凡社新書、二〇〇七年。
- ⑨ 竹内洋『教養主義の没落』中公新書、二〇〇三年、一九八頁。
- ⑩ 「書評 はるかなる山河に」『がす燈』一九四九年五月一日号、二八頁。
- ⑪ この詳細については、拙著『戦争体験』の戦後史』参照。
- ⑫ 荒正人『さげわだつみのこえ』『教育』第三卷一二号、一九四九年、

七六頁。

⑬ 出陸「『わだつみのこえ』になにをきくべきか」「人間」第五卷一号、一九五〇年、九一〇頁。

⑭ 和辻哲郎「教養」「和辻哲郎全集」第二〇巻、岩波書店、一九六三年。

⑮ 竹内洋「教養主義の没落」（前掲）、五四―五五頁。

## 二 戦中派と「戦争体験」という教養

### 第二次わだつみ会と「語り難さ」への固執

『きけわだつみのこえ』とわだつみ会は、先述のように、「教養」と関わりつつ、さまざまな共感や違和感を生み出していった。ところが、一九六〇年ごろから、新たな議論が展開されるようになってくる。その契機となるのが、第二次わだつみ会の発足である。

前述のように第一次わだつみ会は、徴兵制反対署名運動や原水爆禁止署名運動を積極的に展開したが、ここでは共産党や学生運動の動向に左右される傾向が強かった。第一次わだつみ会で事務局長や機関紙編集長を務めた岡田裕之によれば、「国際連帯カンパニアに実力以上に動き回って支部なかんずく東京都支部会員の疲労を招いた」うえに、共産党と袂を分かって急進化した反戦学生同盟と共産党系の学生組織・民主青年同盟の対立が、わだつみ会内部にも波及したという<sup>①</sup>。さらに、機関紙代金の回収不振のため、資金難も深刻化した。こうしたなか、第一次わだつみ会は機能不全に陥り、一九五八年八月に解散した。

それから約一年を経た一九五九年六月、日本戦没学生記念会は再結成された（第二次わだつみ会）。第二次わだつみ会のスタンスは、第一次とは大きく異なっていた。第一次わだつみ会が政治主義的な学生運動に近かったのに対し、第二次わだつみ会は、それらとは距離を置いた戦争の語りを重視した。そこで理事に就いた山下肇は、「会の運動の基本方針」を

こう述べている——「会は時々刻々当面するさまざまな政治的課題に、そのたびごとにエネルギーをふりむけることは極力避けようとする。会はずり自らの使命を明確に自覚して、自己の力を着実に蓄積し、性急なスタンドプレイはやらない。会は行動団体ではないのである」<sup>②</sup>。

だが、「行動団体ではない」としても、戦争体験にいかに向き合おうとしたのか。そこで強調されたのが、「一種の『信仰』のような『不戦』の誓い」であった。山下は「他から無関心をせせら笑われ、ナンセンスと批判され」ても、政治運動とは距離をとることを主張し、戦争体験そのものやそれに根ざした心情に固執すべきことを説いた<sup>③</sup>。

こうした姿勢がなかでも際立っていたのは、安田武であった。学徒兵として従軍した経験を持ち、第二次わだつみ会でも常任理事を務めた安田は、その著書『戦争体験』（一九六三年）のなかで、次のように記していた。

戦争体験の意味が問われ、再評価され、その思想化などということがいわれることに、そうした行為の目的のすべてが、直ちに、反戦・平和のための直接的な「行動」に組織されなければならぬ、あるいは、組織化のための理論にならねばならぬようにいわれた、そういう発想の性急さに、私はたじろがざるを得ない。<sup>④</sup>「強調は原文どおり。以下同様」

同時にそこで意識されていたのは、「体験の語りがたさ」であった。安田は一九五〇年代後半から戦争体験に関する文章を多くものしてきたが、それを語るうえでのもどかしさを、こう書き記している——「戦争体験は、ペラペラと告白しすぎたために、ぼくのなかで雲散霧消してしまったのではなく、それは、却って重苦しい沈黙を、ぼくに強いづづけた。戦争体験は、長い間、ぼくたちに判断、告白の停止を強いづづけたほどに異常で、圧倒的であったから、ぼくは、その体感整理の不当な一般化をひたすらにおそれてきたのだ。抽象化され、一般化されることを、どうしても肯んじない部分、その部分の重みに圧倒されつづけてきた」<sup>⑤</sup>。戦争体験は「抽象化」「一般化」ができるものではなく、断片的なもの集積

であり、特定の意味や物語に回収できるものではなかった。安田は戦争体験のそうした側面にこだわり、「その部分の重み」やそれに伴う「重苦しい沈黙」に圧倒されていた。

それは、安田自身の体験に根差したものであった。「玉音放送」が流れた一九四五年八月一五日、安田は朝鮮最北部の戦場におり、ソ連軍と交戦していた。そのなかで、安田のほんの一〇センチ左にいた同僚が、ソ連狙撃兵の銃弾を受け、即死した。安田はその体験から、自らの戦後の生と戦友の死とが「わずか十糧の『任意』の空間、あるいは見知らぬ異国の狙撃兵による『恣意』の選択もたらした、まさに言葉そのままの意味での、致命的な偶然」のうえにあることを実感した<sup>⑥</sup>。また、「終戦の詔勅」が出された日が一日でも前後していれば、安田やその戦友の生死は変わっていたかもしれない。そうした体験から、安田は死を意味づけることに違和感を抱くようになった。

安田は『戦争体験』のなかで、「『他人の死から感銘を受ける』というのは生者の傲岸な頹廢」であると述べている<sup>⑦</sup>。戦争体験の語り難さにこだわろうとした安田にとって、「死者」を「反戦」のイデオロギーなり「英霊顕彰」なりといった意味に結びつけることは、後世を生きる者の傲慢さや頹廢の裏返しでしかなかったのである。

そして、第二次わだつみ会は、安田や山下ら、戦中派世代を中心に設立・運営された。理事長に就いた英文学者・阿部知二は、一九〇三年生まれで戦前派世代ではあったが、理事には、山下肇や安田武のほか、鶴見俊輔、橋川文三、日高六郎といった戦中派知識人が多くを占めた。彼らはわだつみ会のシンポジウムや機関誌で多くの戦争体験論を発表した。しかも、主たる執筆陣は、『思想の科学』の中心メンバーでもあった。そのような言論人が多く集うことで、第二次わだつみ会は社会的な発言力を強め、戦争体験論を生み出す最大の知識人集団になっていった。

## 六〇年安保

こうした議論の背後には、六〇年安保闘争の問題もあった。米軍基地の使用期間や事前協議の問題に加え、強行採決で

条約承認を推し進めようとする岸内閣の強引さへの反感も相まって、日本の輿論は紛糾し、六〇年安保闘争は戦後最大の社会運動に発展した。第二次わだつみ会も、こうした動きを無視できず、一九六〇年五月一三日に安保条約改定に反対する旨の請願書を衆参両議院に提出した。

だが、安田武は戦争体験を現実政治に直結させる思考方法に違和感を抱いていた。戦争体験の語り難さにこだわり、「死者の声」の流用を拒む安田にとって、戦争は六〇年安保問題のような「現時点の要請」のみで性急に論じるべきではなかった<sup>⑧</sup>。

その点では、山下肇も同様だった。先述のように、山下は第二次わだつみ会発足に際し、「他から無関心をせせら笑われ、ナンセンスと批判されても、なお自己の性格を強固に維持し続けるだけの決意が、再発足にあたって特に必要である」と述べたが、それも安保改定の問題を念頭に置いた発言であった。

第一次わだつみ会は政治主義に翻弄されて解体したが、その反省のうえに再建された第二次わだつみ会も、六〇年安保闘争に左右されそうな状況にあった。そうしたなか彼らは、「無関心」「ナンセンス」と「せせら笑われ」ところに踏みとどまることで、「全国に埋没した無数の死を掘りおこし、そのおびただしい死を、『死』そのものの側から考え直」<sup>⑨</sup>そうした。彼らが重視したのは、安保改定阻止を絶叫して警官隊と対峙する勇ましさではなく、むしろ「臆病者に甘んずる勇氣」（安田武）であった。

#### 「わだつみ」の再刊

第二次わだつみ会は、このような戦中派の情念を起点に発足したわけだが、そこでの当初の課題は、『きけわだつみのこえ』の再刊であった。一九五〇年代末の当時、『きけわだつみのこえ』は書店で容易に入手できない状況にあった。発刊当初はベストセラーになったものの、その後二年もたつと、売れ行きは鈍化し、書店にはあまり置かれなくなった。

この遺稿集の出版元も、増刷・販売には消極的になっていった。「わだつみ」を発行した東大協同組合出版部は、一九五一年二月に東京大学出版会に改組された。だが、東大出版会は、協同組合出版部とは異なり、「アカデミックなユニバーシティ・プレス」つまり学術専門出版の路線を明確に打ち出していた。したがって、戦没学徒遺稿集の普及には熱心ではなかった。しかも、学生運動と結びついた第一次わだつみ会のイメージも相まって、『きけわだつみのこえ』には政治色がつきまといっていた。それだけに、学術色の濃い東大出版会が、この遺稿集を敬遠したとしても不思議ではない。<sup>⑩</sup>

こうしたなか、第二次わだつみ会は、この遺稿集を再び世に出そうとした。そこで最初に模索したのが、岩波文庫版としての発刊であった。そこには、教養への憧憬があった。

一九二七年創刊の岩波文庫は、ドイツのレクラム文庫に範をとり、「いやしくも万人の必読すべき真に古典的価値ある書」の普及をめざした叢書であった。<sup>⑪</sup> 廉価で入手できるとあって、岩波文庫は、戦前期より教養主義学生に多く読まれてきた。教養主義が停滞した戦時期においても、岩波文庫を通じて、少しでも教養にふれようとする者は少なくなかった。戦地で岩波文庫を持ち歩き、「インテリ伍長」と呼ばれた太田慶一が、好例である。

第二次わだつみ会は、学徒兵たちの遺稿集を、彼らが愛読してきた岩波文庫という教養メディアに収めようとした。だが、その企画はうまくいかなかった。企画の打診を受けた岩波書店は、「まだ文庫にするのは早すぎるのでは……。文庫にするのはまず戦前の本からでしょう」と断った。<sup>⑫</sup> 戦後十五年ほどを経ているとはいえ、「わだつみのこえ」はまだ「いやしくも万人の必読すべき真に古典的価値ある書」にはなり得ていなかったのである。

#### 「カップ」の大家教養主義

岩波文庫への収載がかなわなかった『きけわだつみのこえ』は、結局、光文社のカップ・ブックスの一書として、一九五九年一〇月に再刊された。当時、カップ・ブックスは、『三光』『みんなみの巖のはてに』といった戦記を立て続けに発

刊し、いずれもベストセラーになっていた。『きけわだつみのこえ』も、こうした流れのなかで再刊された。

だが、カッパ・ブックスと「教養」の関係も見落とすべきではない。一九五四年に神吉晴夫の主導で創刊されたカッパ・ブックスは、岩波新書との差異化をつよく意識していた。岩波新書は、「古典的教養」を扱う岩波文庫に対し、「現代的教養」を紹介するものとして、一九三八年に創刊された。「古典」とは距離を置いているとはいえ、アカデミズムの色彩が強い叢書であった。それに対し、カッパ・ブックスは極力タイムリーなテーマを選び、インテリ層に限らず広い読者層にとつての面白さと読みやすさを追求しようとした。

その編集方針があたつて、カッパ・ブックスは創刊早々、ベストセラーを連発した。一九五四年の年間ベストセラー上位二〇点のなかには、五冊のカッパ・ブックスが食い込んだ。一九六一年には、年間ベストセラー上位一〇点中、八点をカッパ・ブックスが占めた。

だが、カッパ・ブックスは低俗なテーマばかりを扱ったわけではない。川喜田二郎『ネパール王国探検記』、伊藤光晴『経済学入門』、岡本太郎『今日の芸術』など、知的階層の関心を引くテーマでベストセラーになったものも少なくない。『思想の科学』編集長も務めた佐藤忠男も、一九六三年の文章のなかで、カッパ・ブックスの本を四〇冊、発行点数の約一割強は読んでいたことを記している。<sup>⑬</sup>

その意味で、カッパ・ブックスは庶民的教養主義に親和的な叢書であった。神吉は一九五一年の鼎談のなかで、こう述べている――「僕は、やはり娯楽大衆雑誌はそれでいいだろうと思う。だがしかしそれで満足しない読者がいるのですよ。それにわれわれは一体どうするのか、どうすればもつと幸福になれるか、もつと生甲斐を感じるにはどうしたらいいか、私はアプレゲールと一しよに考えて行こうと思うのですよ」<sup>⑭</sup>。カッパ・ブックスは、神吉のこのような出版姿勢を反映させたものであった。カッパ・ブックスは岩波新書や岩波文庫のような「正統的な教養」との差異化をはかると同時に、娯楽一辺倒の出版物とも一線を画した庶民的教養主義の叢書であったのである。

『きけわだつみのこえ』が収められたのも、このシリーズであった。つまり、「わだつみ」は、「岩波」的なエリートの教養ではなく、「カッパ」的な庶民的教養に親和性が見出されていた。神吉はこの書物の「刊行者のことは」のなかで、「私たちは、本書を今日の若い世代、さらに今後に成長する未来の世代のためにも、読みやすく、理解しやすく、またどこでも入手しやすい形を、と願いました。同時に本書は、これを機として完璧な記念碑・納骨堂としての古典的な永遠普遍性をかちうべきものであります」と記している。そこでの「古典的な永遠普遍性」は、アカデミズムに近い「正統的な教養」ではなく、「読みやすさ」「理解しやすさ」を旨とする庶民的な教養を意味していた。

カッパ・ブックス版『きけわだつみのこえ』は、刊行後九カ月で一刷となるなど、好調な売れ行きを示した。かつてのようにベストセラーになることはなかったが、書店のカッパ・ブックスの棚に常備されることで、継続的に読者を掘り起こしていった。一〇年前のベストセラーをロングセラーに転換させたことが、『きけわだつみのこえ』におけるカッパ・ブックスの機能であった。以後三〇年間で七八刷、四六万部に達した。

#### 戦争体験の世代間断絶

とはいえ、「わだつみ」に象徴される戦争体験は、つねに共感を持って受け入れられたわけではない。それへの拒否感が見え始めたのも、この頃からであった。特に、戦中派と戦後派（終戦時に一〇歳未満の世代）・戦無派（戦後に出生した世代）との軋轢は顕著だった。

一九三五年生まれの高橋武智は、一九六五年の文章のなかで、「現在と絶縁して戦争体験にのみ没入していかうとする」態度は「体験自身が風化し変質してしまう」としたうえで、「あくまで現代の立場に立って、時々刻々過去をとらえなおすことよつてのみ、——体験を意識化するのはこのことにほかならない——体験はたえずよみがえり、新しい価値を賦与される」と述べ、安田のような戦争体験に固執する姿勢との差異を明確にしていた。<sup>⑧</sup>

戦後派世代の古山洋三は、一九六四年の座談会のなかで、「戦中派の中には、戦後のいろいろな過程ではじきだされて戦争体験に閉じこもってしまい、ぼくらとは通路がないようなところに入ってしまった人があるんじゃないか。（中略）何か八ツ当りの戦後派の若い奴にも、あるいは平和運動をやっている人達にも当たっている」と述べ、戦争体験に固執する戦中派の姿勢が、下の世代とのコミュニケーションを妨げていることを指摘した。<sup>⑩</sup>

当時の二〇歳代から三〇歳代前半の戦後派・戦無派といった青年層は、終戦前後に出生しており、その戦争体験は戦中派とはまったく異なっていた。戦中派世代が出征経験を少なからず持っていたのに対し、戦後派・戦無派世代は幼少期に銃後で戦争を体験したか、場合によっては、その記憶や体験自体を持たなかった。それだけに、戦中派世代が抱え持っていた語り難い情念を、戦後派以下の世代が共有することは困難だった。戦中派に対する若い世代の違和感は、こうしたなかで生み出された。

#### 執着と嫌悪

もともと、安田武は、年少世代からの批判を冷やかに突き放している。

何を継承するかが緊急の課題であって、何を伝承するかは、二の次のことである。それに、伝承ということが可能になるためには、継承したいと身構えている人びとの姿勢が前提であろう。継承したくない、と思っている者に、是が非でも伝承しなければならぬ、と意気こむような過剰な使命感からは、多くの心はおよそ遠いところにある。（中略）戦争体験から何も学びたくないと考える者、あるいは何も学ぶことはないと考える者は、学ばぬがよいのである。<sup>⑪</sup>

安田が挑発的な表現のなかでこだわっていたのは、戦争体験の伝承の困難さであった。戦争体験の表層を都合よく、

時々の政治主義に流用することなど、安田には許容し難いことであった。

このような姿勢は、当然ながら、若い世代にさらなる反感を掻き立てた。高橋武智は一九六五年のわだつみ会シンポジウムのなかで、「その勝手たるべし」という同じ事は、伝承するつもりがあるのかないのか、伝承する側にとっても同じだと思ふので、伝承する気のない人の戦争体験は私は返上したい、受け取る気はない」と語っていた<sup>⑬</sup>。一九四一年生まれの教育学者・長浜功も、一九八二年の座談会「わだつみ会の活動を考える」のなかで、「ぼくも体験世代の人とある意味ではつながって行きたいと思うけれども、あまり体験を重視するという形ではなくて会と関わって行きたい」「八・一五や十二・一不戦の集会に出てみますと、発言はやはり若い世代より圧倒的に体験世代が多い。そういう状況を見てみると、やはりぼくの望んでいる会の雰囲気とはちよつと違う」と発言していた<sup>⑭</sup>。ここにも、体験そのものとは距離をとろうとする姿勢を見ることができるといえる。

それは、彼らが年長世代の戦争体験の語り威圧感のようなものを感じ取っていたことの裏返しであった。若い世代にとつて、年長者の語りは、自分たちとの認識の共有というよりはむしろ、若い世代の発言を封じるものであった。長浜は先の座談会で「戦争体験を持っている人たちが発言すると、こちらはとつても発言しにくくなるという状況が今までずいぶんあった」「おれたちはこういう目にあつたんだ、お前たち知つてゐるか、みたいなレベルで議論が止まつてしまつてゐる」と語つてゐる<sup>⑮</sup>。これは、当時の若い世代が広く感じていたことであつた。

#### 「教養」としての戦争体験

戦中派の戦争体験への向き合い方は、奇しくも、かつての教養の語りに酷似してゐた。先に述べたように、教養主義の価値観では、古典およびそれへの深い知識を有する年長者への従属が自明視されてゐた。「世界には百度読み返しても読み足りないほどの傑作がある。そういう物の前に跪くことを覚えたまえ」という和辻哲郎の言葉は、そのことを物語つて

いた。ここで「教養」や「古典」を「戦争体験」に置き換えたならば、それは戦中派の語りにも重なるものとなる。戦争体験は「百度読み返しても読み足りない」ほど深遠なものであり、年少者は「そういう物の前にひざまづくことを覚え」なければならぬ。戦後派以下の世代には、戦中派の言葉はこのようなように聞こえていた。

その意味で、戦争体験は一種の「教養」であった。それは学校の正課で教わるものではなかったが、「進歩的」な学生にとつて、隠れたカリキュラム (hidden curriculum) であった。だが、それだけに、戦場体験を持ちえない戦後派の若者にとつて、戦中派の議論は、劣位感や跪拜をもたらす象徴的な暴力とも感じられたのである。

戦中派世代は、かつては年長の教養主義者たちに「事後の学生」として、教養の欠如を蔑まれていた。戦没学徒をめぐる評価にも、それが投影されていた。そして、戦中派世代は、しばしば、それに反感を抱いた。たとえば、安田武は、『きけわだつみのこえ』に「教養の欠如」「眼界の狭さ」を感じ取った出隆に対し、「さかしらで傲慢な結論」「臆面もなく(中略)まがまがしい、『教訓』を書き連ねて恬然たる学者」と非難している<sup>②</sup>。だが、彼らが発言力のある年代となり、自分たちに固有の戦争体験を語り始めたとき、それは奇妙なまでに教養主義者の口調に酷似していた。

もっとも、安田らの議論が、年少者を威圧し、彼らの発言を封じることが意図していたのではなからう。戦争体験が政治主義に絡めとられるなかで、何が見落とされるのか。そのことへの切迫した懸念に駆られたというのが、実際のところではあるだろう。だが、こうした直接的な意図を離れて、安田ら戦中派の戦争体験論は、若い世代に対し、教養主義的な象徴暴力として機能したのであった。

#### 政治への流用と転覆戦略

高橋武智や長浜功ら戦後派が戦争体験そのものから距離をとろうとしたのも、彼らが感じていた象徴暴力に抗うためでもあった。そのことが、彼らの政治への接近を加速した。

一九六〇年代は、安保闘争に始まり、ベトナム反戦運動、沖縄返還闘争など、戦後史に残る政治運動が度々生じ、反戦運動や学生運動は熱を帯びていた。これらの運動の主たる担い手が、戦後派や戦無派の若い世代であった。当然ながら、彼らは当時の政治的な問題とかつての戦争の問題を、積極的に結び付けようとした。それだけに、政治的有効性を切り捨てるかのような戦中派の戦争体験論には、不快感を抱いた。

高橋武智は、わだつみ会総会に寄せた一九六五年の文章のなかで、ベトナム北爆や自衛隊増強の問題を念頭に置きながら、こう述べていた——「もしここで何らの抗議もなし得ないとしたら、ぼくたちの会が拠ろうとしている『思想』は単に言葉の遊戯になってしまふ。いや、それどころか、体制側の動きを無条件に承認するためのかくれみになってしまふであろう。平和の思想を研究するのもよい。戦争体験に固執するのもよい。だがその『研究』なり『固執』なり、そのこと自体が、抵抗の意志表示たりうるような立場に腰をすえるべきときである」<sup>②</sup>。高橋武智はベトナム反戦運動にも深く関わっており、のちに脱走アメリカ兵の国外逃亡を積極的に支援した。高橋にしてみれば、現実政治から距離を置こうとする戦中派の戦争体験論は、有効性がないどころか、「体制側の動きを無条件に承認するためのかくれみの」にさえなってしまうように思われた。また、ある大学生は、一九六六年のわだつみ会シンポジウムのなかで、「我々にとつて、戦後体験と切りはなされたかたちで戦争体験が出されるかぎり、いつまでも不可解なものとしてどまらざるを得ないと思いません。現実には起きていますさまざまな問題、たとえば日韓問題、そういった問題に即して戦争体験が語られるべきではないかと思うのです」と発言していた<sup>③</sup>。

現実の政治状況と戦争体験を積極的に結び付けようとする戦中派世代の姿勢に、戦後派・戦無派世代は、苛立ちを募らせていた。だが、その苛立ちの背後には、内省的な教養のように戦争体験を語る戦中派の象徴暴力を覆そうとする意図も秘められていた。

こうした軌轢の帰着点をなすものが、わだつみ像破壊事件であった。

まわすという事件がおこった。この像は、『きけわだつみのこえ』の発刊を記念して、一九五〇年に第一次わだつみ会が

一九六九年五月二〇日、立命館大学に置かれていた「わだつみ像」を全共闘の学生が破壊し、首に縄をつけて引きずり

### わだつみ像破壊事件

### 三 わだつみ像破壊と教養主義の没落

- ① 岡田裕之「小史 わだつみ会の運動」日本戦没学生記念会編『わだつみのこえ（復刻版）』八朔社、一九九二年、V頁。
- ② 山下肇「会の運動方針について」『わだつみのこえ』創刊号、一九五九年、五十六頁。
- ③ 同上。
- ④ 安田武『戦争体験』未来社、一九六三年、一三七頁。
- ⑤ 同上、九二頁。
- ⑥ 同上、一三三頁。
- ⑦ 同上、一四二頁。
- ⑧ 安田武「拒絶の思想」文和書房、一九七三年、一二四―一二五頁。
- ⑨ 安田武「戦争体験」（前掲）、一四一頁。
- ⑩ もっとも、東京大学出版会は、一九五二年に東大新書の一冊として再刊していた。だが、それは格別の反響を呼ぶこともなく、書店から姿を消していった。
- ⑪ 岩波茂雄「読書子に寄す——岩波文庫発刊に際して」、一九二七年。
- ⑫ 山下肇「きけわだつみのこえ」秘話「ほん」八七号、一九八〇年、四頁。
- ⑬ 佐藤忠男「カッパ・ブックス論」『週刊読書人』一九六三年一月二五日。
- ⑭ 大宅壮一・坂西志保・神吉晴夫（鼎談）「ベスト・セラーは追っかかず」『毎日新聞』一九五一年七月一四日。引用は、同鼎談を収めた加藤一夫編『カッパの本』光文社、一九六八年、二九頁。
- ⑮ 高橋武智「総会への覚書」『わだつみのこえ』二七号、一九六五年、一〇頁。
- ⑯ 座談会「わだつみ会の今日と明日」『わだつみのこえ』二〇号、一九六四年、三九頁。
- ⑰ 安田武「戦争体験」（前掲）一四九―一五〇頁。
- ⑱ 「第六回シンポジウム報告——戦後二十年と平和の立場」『わだつみのこえ』三〇号、一九六五年、四一頁。
- ⑲ 座談会「わだつみ会の活動を考える」『わだつみのこえ』七五号、一九八二年、六一頁。
- ⑳ 同上。
- ㉑ 安田武「人間の再建」筑摩書房、一九六九年、三三三頁。
- ㉒ 高橋武智「総会への覚書」（前掲）、一〇頁。
- ㉓ 「第七回シンポジウム記録」『わだつみのこえ』第三六号、一九六六年。

制作したものである。立命館大学では、この像の前で定期的に「不戦の集い」と題した集会が開かれ、学生や教職員が参加していた。「反戦」のシンボルであったこの像が破壊されたことは、社会に衝撃を与え、全国紙はじめ主要メディアでも取り上げられた。

だが、彼らはなぜ、わだつみ像を破壊したのか。彼らは、ベトナム反戦運動や沖縄無条件返還闘争など、当時の反戦運動にも近かったわけだが、にもかかわらず、なぜ、「反戦のシンボル」ともされるわだつみ像に憎悪を抱いたのか。

結論を先走るならば、彼らにとって、わだつみ像は「反戦のシンボル」というよりはむしろ「反動のシンボル」であった。そもそも、彼らにとって、「わだつみ」に象徴される「戦後民主主義」は、唾棄すべき墮落と腐敗を意味した。

像破壊を主導した立命館大生・鮎原輪は、一九七〇年のエッセイ「死者たちの復権」のなかで、わだつみ像が「戦後民主主義革命の挫折と敗北」「擬制『平和と民主主義』路線のゆるやかな腐敗過程」を象徴するものであるとしたうえで、「わだつみ像破壊の思想」を次のように記している——「『わだつみ像』破壊は、わたしたちが空白の戦後、あるいは指導者、知識人たちに向けて放った反乱の狼火であるのだ。実に、わたしたちはむしろ倫理的とも言うていい要因でもって『わだつみ像』を空白の戦後に立つ虚像として、あるいは戦後の生者たちの傲岸が死者たちに押し付けた免罪符だと判断するがゆえに計画し、そして破壊したのである」<sup>①</sup>。鮎原にとって、像破壊は、「戦後民主主義」の「傲岸」「腐敗」、そして、そうした体制を支えてきた知識人たちを象徴的に非難する行為であった。

もともと、全共闘学生あるいはそれに共感する者のすべてが、鮎原らの行動を支持したわけでもない。「一九六九年一月の安田講堂攻防戦くらいまでは「全共闘による闘争を」好意的に見ていた」という吉川勇一は、「あの像が壊されたときは、困ったなあというか、問題提起するにしても違うやり方があったはずだ」という思いを抱いたという<sup>②</sup>。鮎原自身も、全共闘のなかで像破壊の実行に反対する者もいたことを記している<sup>③</sup>。

だが、像破壊事件に象徴される「わだつみ」への反感が、全共闘学生を含む若い世代に広く共有されていたのも、また

事実である。わだつみ会会員でもあった者たちにおいてさえ、その傾向は顕著だった。

わだつみ会のメンバーで、全共闘にも近かった矢作彰は、一九六九年一月一日・一九日の安田講堂攻防戦を念頭に置きながら、次のように述べている。

「一九六九年の」一・一八、一九、その日、二十数年前、多くの学徒兵達が従順に権力の意志に従って、銃を肩に死地へ向って出た安田講堂で、学友達は旗をふり、石を投げて、権力と対決した。そして二十数年前多くの学徒兵達を「複雑な」、あるいは「晴れやかな」気持ちで見送った教官たちは、血だらけになって「機動隊に」連行される学友をこぞき、「君はそれでも学生か」とのしり、権力の侍女同然に、いじけた顔で検問をする……もはや対比は明らかではないか。<sup>④</sup>

若い世代にとって、「多くの学徒兵達を『複雑な』、あるいは『晴れやかな』気持ちで見送った」戦時期の教官たちは、大学紛争下、機動隊に連行される学生をのしる「権力の侍女同然」の教官たちに重なり合うものであった。

また、別の学生は、一九六九年にわだつみ会が企画した座談会のなかで、「東大斗争が激化して来た時、『きけわだつみのこえ』を読まなければいけないという発想は僕らにはない。あの本は戦争中何も出来なかった人々の遺言であり、わだつみ像自身が戦中派が何も出来なかったということを証拠立てるもの」でしかないと言っている。<sup>⑤</sup>「わだつみ」は「権力に迎合する大人たち」「何の抵抗もできなかった無気力な大人たち」を映し出し、また、その「大人たち」によって作り出された「戦後民主主義」の閉塞を思い起こさせるものであった。

こうした見方は、学生のみならず、若手の知識人にも共通する面があった。戦後派世代でわだつみ会常任理事を務めていた古山洋三も、「わだつみ会の運動は一言でいうと、戦後民主主義にそったもので、その功罪、限界を考えると、戦後民主主義が根底的に問われているし、その中に含まれている限りでのわだつみ会の有効性が小さくなって来ている」と述

べ、「全共闘運動などに積極的に参加している学生の世代がわだつみ会運動の中心に入り」、「今までのわだつみ会の原理をラディカルに組みかえ」ていく必要性を主張していた。<sup>⑤</sup> 古山と同年代のフランス思想研究者・田中仁彦も、像破壊事件直後に書かれた文章のなかで、前述の矢作彰の議論を好意的に引きながら、「『わだつみ像』破壊は本当にゆううつなニュースであった。しかし、それを平和と民主主義の破壊などといきりたつ前に、果してそれを言う資格があるかどうか考えてみる必要があるだろう。五月二〇日「像破壊事件が起きた日」以前に、われわれ自身が像を破壊してしまっていないかたかどうか」と述べていた。<sup>⑦</sup>

#### 共感と反感の振れ

これに対し、戦中派をはじめとする年長世代は、激しい怒りを抱いた。安田武は『毎日新聞』（一九六九年五月二九日夕刊）に寄せた文章のなかで、「像そのものを破壊するとは、彼らの思想と行動の真意を疑わざるをえないし、いや、もつと率直にいつて、彼らの無知と無恥に絶望せざるをえない」と、烈しく全共闘学生たちを非難した。わだつみ像を倒し、「戦没学徒たちは権力に従順で、抵抗する意志のない存在」と決め付ける行為は、安田にしてみれば、「『平和』な現代」とは比較にならない過去の歴史状況を一顧だにしない姿勢のあらわれであり、全共闘学生たちの「歴史認識における驚べき単純さ」を示すものでしかなかった。<sup>⑧</sup>

戦中派よりもやや下の年代ではあるが、一九三〇年生まれの野坂昭如も、「『わだつみ』像破壊の衝撃」（一九六九年）のなかで、「出陣学徒をおろかど決めつけるのは、たしかに、前の戦争にまったく何の責任も持たない、全共闘諸氏の年代の特権であろう」としたうえで、こう述べていた——「戦没学徒の死によって平和がもたらされたものではない。その死が犬死であったか、あるいは価値あるものだったか、生きてる者がえらそうに判定するべきものではない。（中略）女々しい遺書を残して、あるいは空虚なたかぶりの言葉を肉親にいいおいて、死地にむかったその心ざまを、一片の、たたき

つけるような片言隻句によって、裁断しないでほしい」<sup>⑨</sup>。

敗戦を一四歳で迎えた野坂は、戦争最末期を度重なる神戸空襲のなかに過ごした。そこで養父母を亡くし、妹を一人で世話するも、飢えによる栄養失調で喪っていた。その後、新潟県副知事の実父に引き取られるまで、野坂は焼跡を放浪し、「駅」の構内で誰一人みとるものもないまま飢えに飢えて、最後には自分の垂れ流した下痢を指になすって口にはこび、それこそがこの世の名残りとなった浮浪児の一人として過ごした<sup>⑩</sup>。そうした経験を負っていただけに、「死者をおろかとかきめつける」若者のありようには、激しい憤りを抱いた。

とはいえ、年長世代の反応が一枚岩であったわけではない。安田武と同じ一九二二年生まれの星野芳郎は、一九六九年六月の文章のなかで、「わだつみ像が大学の隅から消えることは、日本の平和運動にとって、むしろよいことではないか」と語っている<sup>⑪</sup>。立命館大学の教員であった星野は、わだつみ像に象徴される「若者たちは、若い知能のあらんかぎりをふりしぼって悩み、考えぬいた」（安田武「わだつみ像破壊の意味するもの」という学徒兵像に違和感を抱いていた。星野にしてみれば、それは学徒兵の実態と乖離したものであった。星野は戦時下の学徒兵の思考様式について、こう回想している——「大半の人間は、自分のまわりに小さな世界をつくって、その中に逃げ込もうとしていた。一方では、和辻哲郎の『古寺巡礼』や亀井勝一郎の『大和古寺風物誌』などの世界に沈潜し、他方では麻雀や酒にひたるという状況で、戦争に進んでとびこむのでもなく、むしろ反対するのでもなく、ただ戦争のことも、人生も考えまいとして、その日その日を送っていたのではなかったか」。そのような見方からすれば、『きけわだつみのこえ』は、「現実には戦場に行く日がやってきて、はじめて狼狽し、ため息とも嘆きともつかぬくり言を述べた」ものにすぎなかった。また、星野は、「もし、インテリゲンチヤの苦惱というなら、なぜ、よその国まで出かけて、何の罪もない中国人を殺さねばならないかという苦しみがあべきだろうが、それはなかったようである」と述べ、学徒兵の戦争協力や倫理観の欠如を批判的にとらえている。それだけに、星野にとっては、「苦悩を面にあらわしているわだつみ像は虚像」であり、それを指摘することこそが「戦

争体験の伝達の本当の意味」であった。<sup>⑩</sup>

星野のこの文章は、安田武が『毎日新聞』に寄稿した像破壊批判を受けて、同紙（一九六九年六月五日）に発表したものであり、その後も両者の間では論争が展開された。

だが、両者の議論の相違とともに、その接点も見落とすべきではない。たしかに、像破壊の評価については、安田と星野の議論は真つ向から対立している。だが、それは、わだつみ像を「戦争体験のシンボル」とみるか「虚像に堕したものの」と見るかの違いによるものであり、戦争体験に正面から向き合うことを主張する点では、両者は一致していた。

さらに言えば、その点では、像破壊事件を起こした鮎原にもいくぶん共通していた。一九四四年に吉林省に生まれた鮎原は、終戦直後に満州引揚を経験していた。もちろん、幼少のころであっただけに、ほとんど記憶にはなかったが、母親からその話を聞かされたり、その後、満州開拓団の記録を読むなどして、引揚体験を重くとらえていた。また、鮎原が親しくしていた従姉は広島で被爆していた。彼女はその後遺症に悩まされたあげく、鮎原が二〇歳前後のころに縊死した。

しかも、それは孤独死であり、死後一カ月後に、腐乱した姿で発見された。鮎原は、その無惨な自死に大きな衝撃を受けた。<sup>⑪</sup>それだけに、「専修念仏みたいな『反戦と平和』の題目のもと、「心にもない標語を喚きたて、ガラクタ偶像を乱立」することには腹立たしさを感じていた。像破壊を行う動機にも、「被爆した死者も……、腐乱した妙さんの死も浮かばれない……」という思いがあったという。<sup>⑫</sup>鮎原は、先の「死者たちの復権」の末尾で「わたしたちが死者たちの象徴を作り出すこと、あるいは、彼ら死者たちに向けて美しいことばを偽造することによって、わたしたちは死者たちから遠のき、自らの死をも喪失してしまう」と述べている。<sup>⑬</sup>そこには、「『他人の死に感銘を受ける』というのは生者の傲岸な頽廢」であると語った安田武にも、いくらか通じるものがあつた。

むしろ、彼らと距離があったのは、像破壊事件の際に周囲で盛り上がった学生たちであったように思われる。

鮎原の回想によれば、彼が二名とともに丸太のベンチをかついで像を倒壊させると、その二名は「台座の横にへたり込んで笑」いつつ、「肩が息で揺れていた」という。鮎原もその横に座り、その後の推移を眺めていた。「もう見るだけであった」という思いがあった<sup>⑧</sup>。それは、彼らの興奮とともに、「反戦平和」のシンボルをあえて破壊することに対する強度の緊張感によるものでもあっただろう。それに対し、周囲は一瞬の静寂のあと、騒音と喚声が「堰を切って雪崩れこ」み、その場は祝祭の空間と化した。誰かがロープを持ってきて、「引き倒されたわだつみの像は、とんでもないことに、ムッソリーニみたいに引き回され」た。「つい数か月前までは、反代々木セクトでさえ像に赤旗を立てかけ、法事まがいの集会を行っていた」ものが、像破壊を機に「廃仏毀釈に押しかける群衆さながら」の状態になったという。そこには、鮎原が内面に抱いていたような戦争の記憶へのこだわり、あるいは像破壊に伴う強度の緊張は見られない。

もともと、鮎原は、これらの学生の行動について「応援のロープ」と好意的に評している。だが、戦争体験への思い入れが強い鮎原と、祝祭化した周囲の学生たちとの間には、じつは大きな距離があったように思われる。

その点では、「わだつみ」への反感を語っていた他の全共闘系学生についても同様であった。前述のように、若いわだつみ会会員、なかでも全共闘に近い者たちは、『きけわだつみのこえ』を読まなければいけないという発想は僕らにはない。あの本は戦争中何も出来なかった人々の遺言であり、わだつみ像自身が戦中派が何も出来なかったということを証拠立てるもの」という思いを抱いていた。それに対し、鮎原が憤りの矛先を向けたのは、『わだつみ』や「戦争中何も出来なかった人々」というよりは、それを偶像化・虚像化して祭り上げているかのような状況に対してであった。

鮎原は、当時を回想した手記のなかで、『きけわだつみのこえ』に収められた戦没学徒の手記やそこに発する「反戦意

識の連鎖」に対する共感を記している。ただ、彼が問題にしようとしたのは、手記そのものというよりも、そこから生み出される社会的共感のあり方であった。「なまじな共感に、ぼくらは引つ掛かりを覚えた」「共感は粘液のように纏わりつき、思考を停止させている」「ぼくらは粘液膜を破って酸素を吸入しなければならぬと思つた」——結原が違和感を抱いたのは、「わだつみ」の体験や記憶そのものではなく、それを取り巻く「共感」という「粘液」であつたのである。

### 教養主義の没落

わだつみ像破壊事件が示すのは、こうした「戦争体験の断絶」ばかりではない。同時にそれは、教養主義の没落をも浮き彫りにしていた。

高度経済成長に伴い大学進学率が上昇したが、その結果、大学卒業者はエリートとしての地位を失つた。そうなること、かつてはエリートの指標であつた教養の有用性は低下する。ただのサラリーマンという未来しか見えないのであれば、苦勞して教養を獲得し、ノン・エリートとの差別化をはかることの積極的な理由など見当たらない。むしろ、そこで際立つようになつたのは、教養の暴力であつた。

教養とはそもそも、それを持つ者の持たない者に対する差異化・優越化の戦略であつた。内省的な教養主義とマルクス主義的教養主義が拮抗することはあつたが、いずれも古典なり『資本論』なりの教養に知悉していることを要求するものであり、それに劣る者に跪拝を強いる点では等価であつた。それでも、教養主義がキャンパス文化において規範として機能していたときには、教養の暴力はさほど露見しなかつた。学生たちにとって、教養は憧憬の対象であつたからである。しかし、教養の有用性が見出せない時代になると、学生にとって、教養を身にまとつた大学人は、憧憬の対象ではなく、むしろ、居丈高な存在でしかない。

大学紛争において、学生たちはさかんに知識人を吊るしあげ、彼らの存在意義を執拗に問いただした。一九六八年一二

月に東大法学部研究室が全共闘に占拠された際、丸山眞男は「軍国主義者もいなかった。ナチもいなかった。そんな暴挙だ」と非難した。それに対し、学生たちは「あんたのような教授を追い出すために封鎖したんだ」と言い放ったという。<sup>18)</sup>そこには、知識人や教養に対する若者たちの怨恨を見ることができよう。

そうした学生たちにとって、「わだつみ」は教養の象徴であった。戦没学徒の遺稿には、彼らが古典や哲学、そして岩波文庫を愛したことが記されているが、そのことは容易に教養主義を連想させた。また、「わだつみ世代」である戦中派は、当時、大学教官の中堅層を構成していた。ことに、知識人が多く集ったわだつみ会では、戦中派の多くは大学教授・助教授であった。学生たちにとって彼らは、自分たちを管理し、威圧する存在だった。

必然的に、彼らは「わだつみ」の教養の芳香を不快に感じた。わだつみ会で開かれた一九六九年の座談会のなかで、全共闘に共感するある学生は「今大学に於いては、学生と教授会はいろんな点で対立している。その対立している二人が一緒になってやる平和運動とは何であるのか」と述べ、わだつみ会の「知識人的な平和運動臭さ」への嫌悪感をあらわにしていた。同じ座談会で、ある東大生も、「戦中派の人達のとらえ方は、学問研究をすることは、何がなんでもよいことだという風に問題をたてて、だから、その学問、研究を放り出して戦場に出かけなければならなかったのがわだつみの悲劇だということになる。そういうことは東大紛争で粉砕されたと思うのです」と発言していた。<sup>19)</sup>

ここには、「わだつみ」や戦中派の教養臭さに対する反感が浮かび上がる。学問や教養を絶対的な「善」ととらえる姿勢はここでは否定されており、「わだつみ」世代との共同歩調の破綻が宣せられている。知識人と学生がともに平和運動を行うこと、言い換えれば、教養と反戦の接合は、「東大紛争で粉砕された」のであった。

このように考えると、わだつみ像破壊事件は、二重の意味で象徴的である。ひとつには、これまでに述べたように、それは戦争体験や戦中派の地位低下を表していた。と同時に、それは教養主義の没落を象徴するものでもあった。知や教養といったものは、学生たちにとってすでに共感の対象ではなく、むしろ、自分たちを威圧するものであった。そのことに

憤りを抱いて、彼らは大学紛争を闘い、わだつみ像破壊を喝采したのである。戦争体験と教養、さらに言えば「戦争体験という教養」は、かくして、若い世代の支持を失った。

とはいえ、それも逆に言えば、彼らが教養の規範を内面化していたことの裏返しであった。教養主義の価値観が欠落しているのであれば、そこには教養に対する敵意ではなく無関心こそがうかがえるはずである。彼らが大学の知のありように憤りを感じたのは、彼らが思い描いたような知の営みが、大学の無味乾燥なマスプロ教育では成立せず、彼らが裏切られた思いを抱いたがゆえであった。先の東大生も、その座談会のなかで「東大に於いて為されている教育、研究が今の社会に於いて如何なる意味を持つているかということが問題だと思う」と述べていた。鮎原輪も、大学入学以来、「われわれにとつて文学とはなにか？」という問いにこだわっていたという。教養に対するこうした思い入れや憧憬が裏切られたとき、それは教養に対する憤怒へと転化する。

ちなみに、わだつみ像は一九七六年五月二〇日に再建された。だが、それは防弾ガラスのケースに収められた。像破壊事件から七年を経てもなお、「戦争体験という教養」に対する若者の憤怒は、防弾ガラスでなければ防げないほどに、強固なものであったのだろう。

- ① 鮎原輪「死者たちの復権——わだつみ像破壊の思想」『朝日ジャーナル』一九七〇年二月八日号、四一頁。わだつみ像破壊事件については、拙著『戦争体験の戦後史』（前掲）、『反戦』のメディア史（世界思想社、二〇〇六年）のほか、小熊英二「1968」（新曜社、二〇〇九年）でも扱われている。
- ② 吉川勇一（小熊英二によるインタビュー）「国境をこえた『個人原理』」岩崎稔ほか編『戦後スタディーズ2』紀伊国屋書店、二〇〇九年、二五九頁。
- ③ 吉林勲三「糸切れた風、飛ばぬ鳥の空」松田政男・高橋武智編『群論ゆきゆきて神軍』倒語社、一九八八年。吉林勲三は鮎原輪と同じく、和田治史のペンネーム。
- ④ 田中仁彦「戦没学生は二度死ぬ」（朝日ジャーナル）一九六九年六月八日号、一〇八頁）に引かれている矢作彰の文章を重引。原文は東大駒場のわだつみ会機関誌『道標』に掲載されているようだが、現物の入手は叶わなかった。
- ⑤ 座談会「大学闘争と『わだつみの理念』」『わだつみのこえ』四七号、一九六九年、四五頁。
- ⑥ 同上、五一頁、二三頁。

- ⑦ 田中仁彦「戦没学生は二度死ぬ」（前掲）、一〇九頁。
- ⑧ 安田武「わだつみ像破壊の意味するもの」『毎日新聞』一九六九年五月二九日夕刊（引用は、安田武「人間の再建」（前掲）一〇五頁より）。
- ⑨ 野坂昭如「卑怯者の思想」中央公論社、一九六九年、一七四頁。
- ⑩ 同上、八九頁。
- ⑪ 星野芳郎「虚像としての『わだつみ像』」『毎日新聞』一九六九年六月五日夕刊。
- ⑫ 同上
- ⑬ 波野四方「壁なしの箱」二〇〇九年二月（未公刊）。波野四方は、和田治史（鮎原輪）のペンネーム。同書からの引用については、著者より許諾を得ている。
- ⑭ 同上、八九頁、九〇頁。
- ⑮ 鮎原輪「死者たちの復権」『朝日ジャーナル』一九七〇年二月八日号、四二頁。
- ⑯ 波野四方（鮎原輪）「壁なしの箱」（前掲）、九七頁。
- ⑰ 同上、九八頁。
- ⑱ 同上、八九頁。
- ⑲ 『毎日新聞』一九六八年二月二四日。
- ⑳ 座談会「大学闘争と『わだつみの理念』」『わだつみのこえ』四七号、一九六九年、四四―四五頁、四六頁。
- ㉑ 同上、四六頁。波野四方（鮎原輪）「壁なしの箱」（前掲）、三〇頁。

おわりに

像破壊事件から十三年を経た一九八二年、『きけ、わだつみのこえ』は岩波文庫に収められた。第二次わだつみ会発足当初は、岩波文庫化は実現しなかったが、初刊本の刊行から三三年を経て、ようやくこの遺稿集は「いやしくも万人の必読すべき真に古典的価値ある書」（『岩波文庫発刊に際して』）となったのである。

だが、その一方で、「わだつみ」と庶民的教養との結びつきは希薄になっていったように思われる。既述のように、一九五〇年代には、「わだつみ」は庶民的教養の代表的なメディアである『人生手帖』『葦』に結びついていいたし、一九五九年には、この遺稿集はカップ・ブックスという庶民的教養メディアに収められた。しかし、一九八〇年代にもなると、すでに庶民的教養主義は衰退していた。『葦』は一九六〇年に終刊し、『人生手帖』は一九七四年に『健康ファミリ』と誌名を改め、健康雑誌へと変質した。カップ・ブックスは一九六〇年代に黄金期を迎え、ベストセラーを独占したが、七〇年代になると、七年近くに及ぶ労働争議の影響もあり、かつての勢いを失った。大学において教養主義が没落し、「読書

する大学生」が少なくなっていたなか、一般大衆のあいだでは、それ以上に「読書を通じた人格陶冶」という規範は失われていた。

教養の価値観を内面化していた戦中派世代や戦没学徒の遺族にしてみれば、岩波文庫化による「わだつみ」の正典化は感慨深いものであったろうが、そうした教養の価値観を持ち合わせていない多くの大衆にとって、岩波文庫化された「わだつみ」は、遠い存在であったのではないだろうか。

このことは、その後のわだつみ像からもうかがうことができる。一九九二年に立命館大学国際平和ミュージアムが開館した際、再建わだつみ像は防弾ガラスケースから出され、同館エントランス付近に設置された。すでに教養の規範は消え去り、学生たちはそれへの敵意さえ抱かなくなった。それゆえに、わだつみ像を防弾ガラスで防御する必要もなくなったのである。わだつみ像がガラスケースの外に出られるようになったのは、それが象徴する教養や戦争体験が再び受容されるようになったからではない。むしろ、「戦争体験という教養」への社会的無関心のゆえであった。

今日、『きけわだつみのこえ』は、「現代の古典」とみなされることも多い。たしかに、そのとおりだろう。だが、その正典化のプロセスには、多様な力学が働いていたし、その過程でさまざまなものがそぎ落とされてきた。教養や「戦争体験の語り難さ」もその一つではある。

「現代の古典」を受け継ぐことも重要なだろうが、そこに至るプロセスも振り返る必要がある。そこには、戦争体験を語るさまざまな欲望が映し出されている。そして、それは、現代を生きるわれわれの「継承」のあり方をも、問い糺すものではないだろうか。

(謝辞) わだつみ像破壊事件をめぐる未公開手記をご惠贈いただき、同書の参照・引用をご許可いただいた和田治史氏に、心より御礼申し上げます。むろん、同書の理解・引用に対するすべての責は筆者(福間良明)にある。

(立命館大学産業社会学部准教授)

the civilian sector.

The Transformation of Arguments on War Experience  
and “Liberal Artsism”: Postwar History of the Reception  
of *Wadatsumi no koe*, Accounts of Fallen Japanese College Students

by

FUKUMA Yoshiaki

This paper analyzes the transformation of public opinion on war experiences by examining how *Kike Wadatsumi no koe* (*Listen to the Voice of the Sea God*), a collection of essays left by the Japanese college-student soldiers who were killed in the war, has been received in postwar Japan.

The Press Department of Tokyo University Cooperative (Toudai Kumiai Shuppanbu) published *Kike Wadatsumi no koe* in December 1949. It became a best seller in the following year. Moreover, it continued to be widely read, and regarded as a classic of writings on the Pacific-War experience. But, why were Japanese in general deeply impressed by the essays of an elite such as these college students?

This collection of essays attained the status of “classic” in the 1980’s, not at the beginning of post-war era. A new edition was republished in 1959 as one of the Kappa Books, a series of popular paperbacks published by Koubunsha. Then in 1982 an Iwanami Pocketbooks (Iwanami Bunko) edition of the book was published. A transformation in public opinion regarding *Kike Wadatsumi no koe* emerged, and the connection between narratives about war and intellectual culture (*kyouyou*) could be visible.

Iwanami Pocketbooks is a series of international classics. The works were the key media of “liberal artsism” (*kyouyou shugi*) of prewar and postwar Japan. The series includes many classics written by great philosophers such as Socrates, Plato, Descartes, Kant, and Kitarou Nishida. Why then were the writings of college students who had not even completed their studies included in such a series?

On the one hand, when *Kike Wadatsumi no koe* was first published in 1949, some people criticized the writings of the fallen students from the viewpoint of “liberal artsism.” Older intellectuals, who had experienced the liberalism or Marxism of the Taishou era in their youth, felt that the writings of students were lacking in terms of intellectual culture of the liberal arts (*kyouyou*). The essays of the college-student soldiers, who had received a higher education during the period

when the militarists suppressed “liberal artsism”, were seen as not sufficiently intellectual.

We must also examine the case of the destruction of the statue of Wadatsumi in 1969. The statue was put up on the campus of Ritsumeikan University in 1953 in commemoration of the publishing *Kike Wadatsumi no koe*. A general assembly for the Fusen no Chikai (Anti-war Oath) was held in front of the statue every year. Not only the student body but also the professors and the president of the university took part in the meeting. But, in May 1969, the students who belonged to Zenkyoutou (All Student Struggle Committee) destroyed the statue of Wadatsumi, which had served as an ‘anti-war’ symbol. They destroyed the statue not only out of hatred of the narrative of the war created by an older generation of fallen students but also due to their hostility to the liberal arts, which was also symbolized by the statue of Wadatsumi. This was the beginning of the steep decline of “liberal artsism” and the period during which the norm of it faded away among college students.

Arguing from this standpoint and based on these observations, this paper considers postwar history in terms of the reception of *Kike Wadatsumi no koe* and the Wadatsumikai, a society founded at the time of the publication of the book.